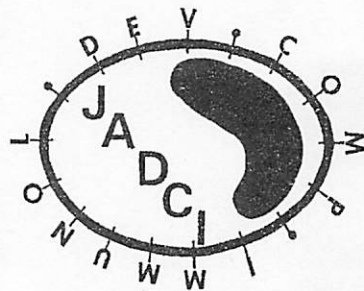


JADCI News

No.13

1998. 5. 16



The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

Office address:
Department of Biology,
Nihon University School of Medicine,
Itabashi-ku, Tokyo 173-8610

目次：

	頁
新会長のご挨拶「十年一昔の話」 古田恵美子	1
新副会長のご挨拶 和合 治久	3
日本比較免疫学会第10回学術集会のご案内	5
[10周年を迎えて]	
素晴らしかった10年 村松 繁	6
感謝・祈発展 友永 進	7
学術集会を振り返って 齊藤 康典	8
新会員の入会を歓迎いたします	10
事務局が交代しました／事務局からのお願い	11

発行者： 日本比較免疫学会会長 古田恵美子
事務局： 庶務・会計 田中邦男
 補助役員 宍倉文夫 大竹伸一 阿部健之
住所：〒173-8610
 東京都板橋区大谷口上町 30-1
 日本大学医学部生物学教室内
事務局 e-mail：jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp
電話：03-3972-8111 内線 2291 (生物学教室)
Fax：03-3972-0027 (医学部庶務課扱い)
郵便振替： 口座番号 00120-4- 18034
 加入者名 JADCI

十年一昔の話

古田 恵美子（獨協医科大学）

1988年10月10日（月）午後2:00から、札幌医科大学で日本動物学会のサテライトシンポジウムであった「比較免疫学シンポジウム」が、発展的に解消することで、「日本比較免疫学研究会」として発足するための話し合いの場がもたれました。満場一致で「研究会」へと出発した記念すべき日であったと思っております。同じ日、続いて「第12回比較免疫学シンポジウム」があり、このシンポジウムの最後の講演が、中村弘明（獨協医大）、浅田伸彦（岡山理大）、斎藤康典（筑波大・下田臨海実験センター）の三先生によってなされました。ナナカマドが色づき始めていた札幌がなつかしく思い出されます。

1989年11月には、第一回学術集会在いよいよ「日本比較免疫学研究会」として東京はエーザイホールで開かれました。日本の比較免疫学会に最初から関係して下さっていたDr. E. L. Cooperも参加し、きわめて活気のある集会がもたれました。

1990年8月の第二回学術集会の総会において、「研究会」から「学会」へとその名称の変更が決定し、第三回からは「日本比較免疫学会」として学術集会被開催されることになりました。

1991年8月の第三回学術集会は、お茶の水の東京医科歯科大学で開催され、1日目は、国際シンポジウムとして、11演題、日本人3名（黒沢良和氏、山崎正利氏、山川稔氏）と外国人8名（Dr. Yoshino, Dr. van der Knaap, Dr. Valembois, Dr. Cooper, Dr. Rizki, Dr. Gateff, Dr. Hultmark, Dr. Söderhäll）により、「無脊椎動物の生体防御」について論じられ、真に国際色豊かに活発な討論がなされました。休憩時間も、懇親会も楽しい英会話の時間でありました。一般講演も多数あり、この時から3日間の開催期間となりました。第三回までは事務局が主体となって開催して参りましたが、次回（第四回）からは学術集会長を置き、その集会長の企画で開催されることとなり、事務局は一息ついたことを覚えております。

第四回は1992年8月山口大学の友永先生により、山口県秋吉台グランドホテルで3日間行われました。日本最大の鍾乳洞も忘れられない思い出となりました。

第五回は台風に直撃された日本大学（和気先生、渡辺翼先生）。大野乾先生、Dr. Reason, 黒沢良和先生、友永進先生、小林睦生先生と徹夜でウィスキーを飲み、英語、日本語チャンポンで生体防御論を、まさに口角泡を飛ばして議論したことも楽しい思い出です。

1994年8月は第六回学術集會として、北里大学の神谷久男先生のもとで、三陸の北里大学水産学部マリンホールで開かれました。不幸にして私は、その直前にオランダのワーゲニンゲンで開かれた「国際比較免疫学会」で体調を崩し、入院騒ぎで出席できず、紙上発表のみでしたが、大変素晴らしい学術集會であったと伺いました。

1995年8月の第七回学術集会は高知大学の楠田理一先生の企画で、高知共済会館で開かれました。オランダのDr. van Muiswinkelによる「硬骨魚類の寄生虫に対する免疫反応」および、渡邊浩先生の「ホヤの自己・非自己認識機構」の特別講演があり、その迫力にもう一度背筋を伸ばされた気がいたしました。あの夜の鏡割り、さわち料理、坂本龍馬の銅像など、目の底に焼き付いております。

第八回は1996年8月埼玉医大の和合治久先生により、埼玉医科大学の真新しい雰囲気に残る立派な講堂で、Dr. Cooper を迎え、和気あいあいながらも、厳しい質疑応答があり、また「植物の生体防御」（名大・道家紀志先生）に今更ながら開眼させられました。

第九回は東北大学の森勝義先生のもと、仙台戦災復興記念館で開催され、「生体防御における活性酸素」のシンポジウムが2日目に行われました。韓国釜山大学の李福律先生の日本語の巧みさに感動させられました。そぼ降る雨に濡れた樺並木の美しさに息を飲む思いでした。

そして、1998年8月20日から22日まで、第十回学術集会在栃木県小山市で開催されようとしております。学術集会長は、不肖、私こと古田恵美子、事務局長山口恵一郎で、がんばっております。どうぞ！皆様方、大勢の御参加と、活気あふれる会作りに御協力くださいますようお願い申し上げます。

「栃木の夏は何もない夏です」が、私共の力で何かを作りたいと思っております。

「もう10年」過ぎました。一昔です。どの学術集會もまさに「比較免疫学」そのものであります。第一回からのプログラムを見て参りますと、プラナリアからヒトまで本当によく論じられてきました。今年は二胚葉性動物にも入っていただきたいと考えております。

昨年12月の選挙で、何かの間違いでしょうか、古田が「日本比較免疫学会長」に選ばれてしまいました。実は私、人や物の陰に隠れて、密やかにアジっているのが得意な人間なのですが、「表舞台」では、かえって踊れないのではないかと心配です。幸いにして、素晴らしい能力のある方々が、私の回りに沢山居られます。この方々に力になっていただいて、無事務めさせていただけますなら、幸いに存じます。

「比較免疫学」は、生体防御の根幹を研究し、応用していくべき学問だと考えております。レクチンや補体、サイトカインなどの根本の役割を論じ、発展させ、その応用まで進むことができましたら、時間とお金を使った甲斐があったというものです。私の生きている間にどうか間に合って欲しいものと願っております。新年度から事務局長となられました田中邦男先生から「特集号JADCI news」というご希望がありました。特集号の記事になれたかどうか、心配しながら、とりとめもなく書きました。

最後の最後になってしまいました。村松繁先生（前学会長）と友永進先生（前副会長）に心から御礼申し上げると共に、これからも何卒お力添え下さいますようお願い申し上げます。筆を納めさせていただきます。

新副会長のご挨拶

埼玉医科大学短期大学臨床検査学科

和合 治久

「あの一、先生一つお伺いしたいのですが、ナメクジの長期間培養された繊維芽細胞の中に、本当にアメーバ運動を引き起こして死んだ細胞をやがて処理するようなマクロファージ様細胞が生じてくるのですか」。これは私が10数年前の日本動物学会で唐突にも古田恵美子先生に質問した時の内容であり、また先生と始めて質疑応答を通して言葉を交わした時のことでもありました。当時、先生は精力的にヤマナメクジの細胞培養系を樹立しようと種々の組織片の初代培養を試みておられました。以来、その古田先生を筆頭に日本動物学会の中では比較免疫シンポジウムとして機能していたサテライトを一つの独立した研究会に格上げしようでは、という機運が幾人かの動物免疫研究者から盛り上がり、私もその一員として活発に行動した記憶が今でも鮮明に残っています。

日本比較免疫研究会がこうして村松繁・元京都大学教授を会長に、また友永進・現山口大学教授を副会長として発足したのは、早くも10年前のことになります。この研究会は第3回学術集会から学会として機能するようになったわけですが、設立されてから通算10年目という学会の重要な節目に当たる時に、副会長としての重要な仕事を仰せつかりましたことは、大変光栄のことと思う一方で、私がこの学会の発展にどれだけお役に立てるのだろうか、という一抹の不安も隠しきれません。けれど、これまでも古田先生と心を同じくして行動してきたことを考えると、また新たな気持ちで新会長と二人三脚できると信じ、次の節目に向かって、私なりに新会長を助け、微力ながら謙虚な気持ちで学会の進展に精一杯力を出してみたい、と考えています。どうぞ会員の皆様宜しくお願い致します。

私が昆虫の食細胞による生体防御反応に興味を抱いたのは今からおよそ23年前のことです。当時、無脊椎動物の免疫機構を手がけていた研究者は非常に少なく、満足にディスカッションできる状況にはなかったように思います。それが今や、比較免疫学会の会員数は200名を超えるに至りました。これほど嬉しいことはありません。この地球上で生活するすべての動物の中で94-95%は骨を持たない無脊椎動物です。その進化上我々の先輩に当たる動物を中心にあらゆる生命体の身

を守る仕組みを探り、その特殊性と一般性を明らかにしようとするのは実に意義のあることであり、また動物たちを環境悪化から守って行く上でも動物の免疫機構解明は非常に重要になってくると予想されます。この意味で、会員の皆様の研究成果は今後社会に対して大きなインパクトを与えるものであると確信しています。

本学会は気軽に議論ができ、研究者同士の意見交流がきちんとできるところに本当の良さがあるように思われます。これまで培われてきた学会の雰囲気や壊すことなく、サイエンティストとして本来の責務を全うすると同時に、会員の皆様の研究が質的に向上して謎であった動物の免疫機構の内幕を語る日が一日も早く訪れるように、皆様とともに歩んでいきたいと願っています。そしていつの日か、日本比較免疫学会での活動が、社会的に意味を持つてくることを信じ、加えて将来日本の研究者とアジアオセアニア地区の研究者が合同で何か行動できる日がくることを夢見て仕事に打ち込みたいと考えています。

日本比較免疫学会第10回学術集会のご案内

日本比較免疫学会第10回学術集会の参加および講演申込のメ切期日は6月8日です。第10回学術集会開催のご案内については、古田恵美子学術集会長よりすでに会員の皆様のお手元に届いていることと存じます。以下に要点のみ掲載いたします。

第10回学術集会 会長 古田恵美子 (獨協医科大学 第二解剖学教室)

会期：1998年8月20日(木)～22日(土)

会場：小山市生涯学習センター (小山駅ビル、ロブレ6F)

(小山市中央町3丁目7-1、TEL：0285-22-9111)

連絡先：〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880

獨協医科大学 第二解剖学 古田恵美子

総研電顕室 山口恵一郎

TEL:0282-87-2138 FAX:0282-86-1463

E-mail:yamakei@dokkyomed.ac.jp

日程： 8月20日(木) 総会、一般講演、特別講演、歓迎会
21日(金) 一般講演、招待講演、シンポジウム、懇親会
22日(土) 一般講演

1) 費用：参加費 5,000円 (DCIアブストラクト掲載費を含む)

懇親会費 3,500円 (歓迎会費を含む)

*7月31日までに連絡いただければ、懇親会費のみ返却いたします。

2) 参加費・懇親会費の振込先 (メ切：6月8日(月))

郵便振替口座番号 00120・9・16271

加入者名 日本比較免疫学会第10回学術集会

3) 参加および講演申込み (メ切6月8日(月))

宛先 〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

埼玉医科大学短期大学臨床検査学科免疫学

和合 治久 (TEL&FAX:0492-76-1531)

4) 宿泊申込み：小山グランドホテルをご希望の場合に限り、「参加申込書」にご記入下さい。

素晴らしかった10年

前会長 村松 繁

私は比較免疫学の大ファンですが、その道の真なる研究者ではありません。にも拘わらず本学会設立以来昨年末まで、延々と会長の役を務めさせていただきました。身に余る光栄なことであったと、人生も残り少なくなった現在、心から感謝しています。今年からは、本来なるべき人が会長になられて、しかも女性であることも加えて、喜びも一入です。

科学随筆めいたことはこれまで二度書きましたので、今回はやめておきます。ただこれだけは、言っておきたいということがあります。それは、比較免疫学は生物学の真髄であるということです。そこには、縦と横の糸が綾のように織りなされています。縦というのは、ヒトの免疫機構の起源と進化を、いわゆる下等動物の世界に探り、そして辿るということでしょう。横というのは、そんなことにお構いなく、動物の"個"の維持機構における多様性を虚心坦懐に眺望することでしょう。私は免疫学というものに巡り合って大変幸福であったと思うのは、この学問分野がすべての生物学を包含していることです。その中でも比較免疫学は、進化と多様性という生物学の二大テーマを土台にしているのですから、生物学の真髄といっても過言ではありません。

生物学の真髄の割には、研究者人口が少ないのは否めません。ごく近未来に急増することも期待できません。その理由はさておき、これは世界的な現象で、あの免疫学先進国のオーストラリアですら、比較免疫学研究者は数人であるというから驚きです。その中で、わがJADCIは会員数百数十人、毎回の学術集会参加者が50人以上、しかも3日間にわたって缶詰状態で熱心な議論が行われていることは慶びに堪えません。しかし唯一残念なことは、一般演題がまだまだ少ないことです。せめて今の倍(去年は20題)は欲しいところです。

学術集会は、第1~3回に古田現会長が奇抜でしかも心暖まる企画をされ、その後もそれが前例となって、楽しい雰囲気満ちあふれています。私にとって、一年で一番の喜びは、この学会に参加することです。今年は第10回で一つの節目になります。次の10年間、この学会がどのように発展していくのかを見守ることを、生き甲斐にしたいと思っています。

感謝・祈発展

山口大学医療技術短期大学部

友永 進

JADCI の創設以来、学会の運営に係わってきた者の一人として、学会が 10 周年という記念すべき年を迎えたことを心から喜んでいきます。この 10 年の間にいろいろな研究分野の沢山の方々とお会いでき、多くのこと学ばせていただき感謝しています。私の担当した主な仕事は、創設以来第 1 回から第 8 回までの英文抄録を編集し、DCI に投稿することでした。この仕事は、毎年（特に初期には）多大の時間を必要としましたが、それでもまあ楽しみながらやらせていただきました。私にとっては良い経験になりました。その経験と、永く担当しました DCI の編集委員の経験を活かして、現在、我が国初の看護学および関連領域の国際誌 Nursing and Health Sciences の創刊に向けて、国際的な編集陣を組織したところです。この数年は、大学の改組に関する仕事に専念せざるをえない状況となり、比較免疫学の研究に取り組めないのがとても残念です。再び研究に専念できる日が来ることを願っています。

JADCI は今年で 10 歳ということで、まだ少年期ですが、会員の皆様のご活躍によって、さらに、青年期、壮年期へと成長したいものです。

比較免疫学は、いろいろな生物の免疫系の研究そのものが面白いだけでなく、複雑に進化したほ乳動物の免疫機構を深く理解するためには不可欠な領域と思います。JADCI の会員の皆様のご健闘と学会の発展を心から御祈りいたします。

学術集會を振り返って

筑波大学下田臨海実験センター
齊藤康典

日本比較免疫学会の発足10周年にあたり、何か文章を書くように事務局から依頼されました。私のようにただ学術集會に参加しているだけで、何のお役にも立っていない者が、記念の年のJADCI Newsに文章を書くのもおこがましいのですが、私なりにこの10年の学術集會について、感じたことを述べさせていただきます。

1989年11月に開催されました第1回学術集會のシンポジウム「水産無脊椎動物の生体防御」に演者としてよんでいただきながら、一昨年（1988年）の第8回学術集會まで毎年参加させていただきました。まず、本学会の学術集會に参加して驚いたことは、休憩室にお茶やソフトドリンクと一緒に酒類が置いてあることでした。そして、缶ビールを片手に講演を聴くことがいとも自然な雰囲気であったことです。これが、創立当時の会長をはじめとする役員の方々が単にお酒好きであったためか、あるいは、会のアットホームな雰囲気を作り出すための深い考えに基づくものかはわかりませんが、この会の伝統のようになって、この10年間続いております。私などは酒が嫌いな方ではないので、なんとすばらしい会であろうとすぐにこの雰囲気に馴染んでしまいました。

また、第4回学術集會から東京を離れて地方で開催されるようになり、それぞれの開催地の特色が加わり、楽しい学術集會となっています。特に第4回の秋吉台のホテルでの学術集會は思い出深いものでした。参加者のほとんどが会場であるホテルに泊まり込み、昼間の学術集會と夜の飲み会でいろいろなメンバーと親交を深め、また、多くの議論ができたこと、そしてこれによって、扱う動物は違っても仲間意識が生まれてきたと思います。その後の各地での学術集會もいろいろな思い出が残っております。第5回の日大藤沢校舎の時は、台風の襲来がありました。また、ゲストの大野乾先生の部屋へ押しかけ深夜まで酒を酌み交わしたことなど。第6回は三陸町の北里大学水産学部で行われましたが、このときも、参加者のほとんどが一軒の旅館に泊まり、夜遅くまで酒を酌み交わし議論しました。第7回の高知では懇親会でよさこい踊りや和太鼓の演奏を披露していただきました。これもまた楽しい思い出です。そして、第8回の埼玉県毛呂山町の埼玉医科大学では、懇親会後の2次会の飲み

屋を探して町中を徘徊したことなど、何故かお酒に関わることばかりが思い出に残っていますがどうした訳でしょうか。

さて、お酒が一役買っているのかどうかは定かではありませんが、比較免疫学会の学術集会は気取ったところが無く、誰もが臆することなく気楽に質問し議論できるところが一番の魅力です。そして、会員の扱っている材料が無脊椎動物から脊椎動物まで広い範囲にわたるこの学会では、このような気楽に話あえる環境が、活発な情報の交換や会員の相互理解を深めていると思います。このような会の雰囲気は第1回から形成されていたわけではなく徐々に形成され、そして維持されて来たと思います。これは、ひとえにこの会の創立以来ここまで会の運営に尽力された執行部の方々のおかげであり、また、学術集会を主催された先生方のご努力によるものと深く感謝しております。さて、今年発足10周年を迎え、過去の反省や将来の展望について考える節目の年ではありますが、私が、今後の本学会の学術集会に望むものは、現在の気取りのない、気楽に話せる学術集会を続けてもらいたいということです。学術集会に参加することが楽しみになるようなそんな集会であり続けてほしいと思います。

Developmental and Comparative Immunology In Japan: The First 10 years.

Edwin L. Cooper, Ph.D., Sc.D.
Department of Neurobiology,
School of Medicine
University of California, Los Angeles

この Review は、第10回学術集会講演要旨集に掲載する予定です。

新会員の入会を歓迎いたします。下記入会申込書をコピーしてご利用下さい。
入会金不要、年会費 3,000 円 (平成 10 年 4 月現在) 入会申し込み頂ければ
振替用紙をお送りいたします
送付先：日本比較免疫学会 (JADCI) 事務局
〒173-8610 板橋区大谷口上町 30-1 日本大学医学部生物学教室内
(問合せは TEL: 03-3972-8111 (内) 2291 または
e-mail address: jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp に願います)

入 会 申 込 書

このたび日本比較免疫学会に入会したく、下記の通り申し込みます。

年 月 日

日本比較免疫学会
会長 古田恵美子殿

氏 名 _____

同ローマ字 _____

所 属 _____

記

会員種別：個人会員

連絡先：(〒 _____) (所属先・自宅 一方を○で囲む)

TEL: _____ 内線 _____

FAX: _____

e-mail address: _____

専門分野： _____

事務局（庶務・会計担当）が交代しました

日本大学医学部生物学教室

田中邦男 宍倉文夫 大竹伸一 阿部健之

新会長古田恵美子先生のもと、庶務・会計を担当する事務局を引き受けることになりました。

我らが学会も10周年を迎え、小山の学術集会は、研究発表に・懇親に一同大いに盛り上がることと、今から期待を膨らませています。今後、益々発展させるための世話係として、事務局が機能するよう私達も頑張ります。どうぞ、御協力の程宜しくお願い申し上げます。

古田会長の獨協医科大学と離れていますので、ご不便をお掛けするやも知れませんが、何卒ご容赦の程。幸い、近年はe-mailのシステムが普及しました。事務局もe-mail address: jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp を設けております。会員諸氏のご意見を頂戴し、会の運営に役立てたいと思います。

また、次回、試みにJADCI NewsをMS WORDのファイルにて添付書類としてe-mail配信しようと思っております。先生方のe-mail addressをお知らせ下されれば幸いです。

事務局からのお願い

- (1) 1998年度会費の納入をお願い致します。同封の振替用紙をご使用下さい。過年度未納分も宜しくお願い致します。
- (2) 会員名簿に記載するために、できればe-mailアドレスをお知らせ下さい。あて先はjadcitnk@med.nihon-u.ac.jpです。
- (3) 今までの会員名簿に変更のある方は葉書、年会費用の郵便振替用紙の通信欄またはe-mailでお知らせ下さい。